



お釈迦さまの弟子に、二十億耳（インド名：リナ・コティヴァーサ）という方がおられました。長者の家に生まれ、自らの足で歩く必要がないほど不自由なく育ったため、足の裏に毛がはえていることで有名でした。また、琴の名手でもあったといいます。

仏弟子になってからは、柔らかい足裏から血を流しながら厳しい修行を続けたにも関わらず、なかなか悟り（心の平安）を得ることができませんでした。

「二十億耳よ。琴の弦を強く固く張ると、よい音色がでるか。」

「仏陀よ。そうではありません。」

「二十億耳よ。琴の弦は弱く緩く張ると、よい音色がでるか。」

「仏陀よ。そうではありません。」

「二十億耳よ。琴の弦が強く固すぎることもなく、弱く緩すぎることもない時に、よい音色がでるだろうか。」

「仏陀よ、まさにその通りです。」

「二十億耳よ、仏道も琴の弦の場合と同様に、
あまり激しすぎても、あまり怠っていてもいけない。」

内藤昭文 著『仏弟子に学ぶ』～逸話に聞く仏教～ より



「中道」は、数多くのお経の中に説かれています。快樂に身を任せることも、逆に自己の体を痛めつけることも、何の利益ももたらさない。修行者はそうした極端な二つの態度を避けるべきであることが説かれます。お釈迦さまも、厳しい修行を捨て去った後に悟りを開かれました。

一方の私たちは、世事に追われ忙しいと言っては、仏法を聴聞する機会があるにも関わらず、それを疎んじてしまいがちです。かといって、毎日常に聴聞し続けながらこの厳しい現代社会を生きていくのが難しいことも、また現実です。内藤先生は、こう書かれます。

人間に、いや私にとってちょうどよい弦の強さとは、どれくらいのものでしょうか。自分で自分にあった強さを考えると、ちょっとでも楽で緩い程度を「これこそ私にちょうどよい」と判断してしまいます。

仏教でいう「中道」とは、常に自己の在り方を問い続けることにあります。

…たった一度だけの聴聞で納得して、もう後は世事に追われ、煩惱まみれで生活してしまつては、浄土往生は阿弥陀さまの本願力によって間違いないものであっても、私の生き方がよい音色であると言えるかどうか。聴聞の場とは、自分勝手によい音色であると思い込んでいる自覚症状のない音痴の私に、美しい仏の音色に出会って、気付かせていただく場であると思います。



「中道」とは、自分がどこにいるかも判断できない（必ず自己中心の思いが混じる）私が、勝手に決める「中間地点」ではありません。「中道」を目指すことは、常に、真実の目を持つ阿弥陀さまに聞いていくことなのです。ご一緒に聴聞いたしましょう。

